

校訓「真実心」を考える

中井治彦

第一章 辞書から読み取る「真実心」の意味

第一節 はじめに

光華女子学園の校訓は「真実心」という漢字三文字の言葉で表現されています。この言葉はそもそもどのような意味の言葉なのでしょうか。この言葉はありふれた言葉を組み合わせた熟語なので、一見単純な意味であろうと思われるのですが、いざその意味を説明しろと言われると案外きちんと説明するのは難しい言葉です。抽象的であり、しかも奥深い意味があると言われている言葉ですので、簡単な一言でどのように説明したらよいか惑います。なんとか説明できたとしても、正しく説明できているのかどうか確信が持てなかつたりします。そんな時は辞書を引いて確かめればよいわけですが、この言葉は「広辞苑」「大辞林」などの一般的な国語辞典には載っていないのです。残念ながらそこで行き詰まってしまうことになります。

しかし、そのような状況から判断して、この言葉の置かれている位置が見えてくるといえることはあります。すなわち、これらの国語辞典に載っていないということから、この言葉は一般にはあまり使われていない言葉であろうと推測できるということです。この言葉が一般的にあまり使われない理由として考えられるのは、この言葉をあえて使わなくても同じ意味の言葉が他に幾つかあつて間に合っているからだと言つてよいでしょう。たとえば、「本心」とい

う言葉や「真心^{まごころ}」という言葉、「誠心」や「誠意」などの言葉があるので「真実心」という言葉が無くても不自由はしないのです。

それでは、なぜ本校の校訓は他の言葉ではなくて「真実心」という言葉なのでしょう。か。「真実心」という言葉があえて使われる場合というのはどのような場合なのかということを考えてみますと、それは、主として仏教用語として使われる場合であると言ってよいでしょう。それも特に浄土系仏教の中の善導流と呼ばれる流派において重んじられて使われているようです。そしてこの言葉は浄土系仏教の教義の核心部分にかかわる重要な意味をもった言葉として扱われています。光華女子学園は浄土真宗一派である真宗大谷派の關係校であるので、その浄土系仏教の流れを汲んだ言葉「真実心」を校訓としているわけです。

このように「真実心」は特定の分野において特定の意味合いを込めて使われることが多いのですが、かといって世間でまったく使われていない言葉というわけでもなく、よく探せばいくつかの辞書に載っているのを見つけることができます。一般的な言葉として「真実心」の意味が載っている辞書としては『日本語大辞典』（小学館）、電子辞書の『精選版日本国語大辞典』（小学館）があります。仏教用語としての「真実心」の意味が載っている辞書としては、『例文仏教語大辞典』（小学館）と『仏教語大辞典』（東京書籍）を挙げることができます。そして、「真実心」という見出しは載っていないのですが、「心」という言葉の説明の中に「真実心」の意味が述べられている辞書として『仏教学辞典』（法蔵館）があります。これらを読み比べてみますと、それらの辞書で説明されている「真実心」の意味は必ずしも同じではないことがわかります。それらは大きく分けて三通りあります。それらの一つは世俗的な意味、そしてもう一つは究極的な意味、さらにもう一つはそれらを媒^{なだ}する中間的な意味、と分類することができます。この三つの意味について、まず辞書に書かれた内容をひとつずつ実際に読みながら「真実心」の意味を考えて行きたいと思えます。また、それと併せて『真宗聖典』の中からも関連する文章を抜き出して、理解を深めるのに役立てたいと

思います。

第二節 凡夫のまごころ 「真実心」の世俗的な意味

【日本語大辞典 第十一卷】（日本語大辞典刊行会編集 小学館）には「真実心」の意味が次のように記載されています。

しんじつしん【真実心】

偽りのない心。うわべだけでなく奥底から思っている心。

＊浄瑠璃・艶容女舞衣（三勝半七）―下

「恨みつらみは露程も、夫を思う真実心、猶いやまさる憂き思ひ」

＊歌舞伎・茶臼凱歌陣立―二幕

「君の御恩に報いよと、我が子に論す真実心」

ここに示されている第一の用例は、「愛情の純粋さ」を表す表現としての用例であり、おおよそ次のように解釈できるとでしょう。「私は、夫に対する恨みの心やつらみの心を露ほども持っておりません。なぜなら、私が夫を思う心は真実心であるからです。むしろそうであるからこそ、よりいっそう愛いの思いが増すのです。」この用例を参考にし、この語の活用例をさらにいくつか作ってみます。次のような使い方ができるでしょう。

- ① 妻が夫を思う真実心。夫が妻を思う真実心。
- ② 子が親を思う真実心。親が子を思う真実心。
- ③ 友人が親友を思う真実心。
- ④ 医師・看護師が患者を思う真実心。患者が医師・看護師を思う真実心。

⑤ 教師が児童・生徒を思う真実心。児童・生徒が教師を思う真実心。

この辞書の第二の用例は、「忠誠の純粹さ」を表す表現としての用例であり、おおよそ次のように解釈できるでしょう。「主君の御恩に報いなさい。息子よ、今こそおまえの主君に対する思いが真実心であることを示す時なのだから。」この用例の意味をもう少し広い意味でとらえて組織や団体の中での代表者と構成員の間の「信頼の純粹さ」を表す意味での活用例も加えて、さらにいくつか活用例を作ってみます。次のような使い方ができるでしょう。

⑥ 社長が社員を思う真実心。社員が社長を思う真実心。

⑦ 元首が国民を思う真実心。国民が元首を思う真実心。

⑦は明治初期から昭和初期にかけて使われた言葉を使えば「忠君愛国の誠」と表現できるものです。「忠君愛国」は当時の学校の重要な教育目標であったので、その時代に創立された学校には「誠」「至誠」を校訓とするものが数多くあります。したがって、昭和十五年創立の本学園の校訓「真実心」もそれに近い意味を含んだものであった可能性はあります。現在でも校訓「真実心」は「大いなるものへの畏敬と謙譲の心」と説明されることがありますが、この説明は明治政府教部省の「三條教則」にある「敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事」以来の流れを汲むものと考えられます。したがって、「仏教精神」にもとづくとはいえない説明であるというべきでしょう。ここまでは「真実心」の世俗的な意味での活用例ですが、さらにこの機会に仏教用語としての真実心の活用例も作って比較の対象として並べておきます。

⑧ 仏陀が衆生を思う真実心。衆生が仏陀を思う真実心。

⑧は「慈悲の純粹さ」及び「信心の純粹さ」を表す表現としての活用例です。本学園の建学の精神は「仏教精神」であるのですから、これが本来的な使い方であると言ってよいでしょう。これについてはこのあと詳しく見て行きたいと思います。

第三節 仏のまごころ 「真実心」の究極的な意味

『仏教語大辞典』（中村元著 東京書籍）には「真実心」の意味が次のように記載されています。

しんじつしん【真実心】

仏・菩薩の具えているまごころ。〈「教行信証」信巻〉

解釈例 仏心なり。弥陀如来の真実心なり。〈「円乘」二六〇一〉

私たち凡夫のまごころはいくら誠心誠意を尽くしてもたかが知れています。仏や菩薩のまごころにはとても及びません。なぜなら私たちの心は、欲に振り回されたり、腹立ちに振り回されたり、勘違いに振り回されたりしてしまうからです。仏や菩薩の心のように清らかで純粹な善に満ちた心であるとはとても言い難いのです。しかしその一方で私たちは、そんなことではいけないなあという思いが心の奥底に確かに有るということにも気がついています。私たちは、心のどこかに仏のまごころに等しい心を持っているのかもしれないと。大乗仏教では、そのことが事実であると、してその心のことを「仏心」とか「仏性」と呼びます。親鸞の著書『「教行信証」の真仏土巻にはその考え方を端的に表した釈尊の言葉「一切衆生はことごとく仏性あれども、煩惱覆えるがゆえに見ることを得ることあたわず」が引用されています。私たちの心は煩惱に覆われているので見ることができないのですが私たちは誰もが仏と等しいまごころを持っています。私たちの心は煩悩に覆われているので見ることができないのですが私たちは誰もが仏と等しいまごころを持っています。さらにもう一つ別の辞書『仏教学辞典』（法蔵館）を見てみますと、この辞書には「真実心」という項目は掲げられていないのですが、「心」の意味の二番目に「真実心」についての記載があります。

しん【心】

①（梵）チッタの訳。

対象をとらえ思いはからう（縁慮の）作用をもつもの。

② (梵) フリドまたはフリドラの訳。

肉団心、真実心、堅実心と訳す。

すべてのものもつ真如法性の真実心、如来藏心のことで思いはからう作用を有する心(縁慮心)ではない。

ここでは、心について2つの意味が取り上げられています。それらのうちで②の意味が真実心です。①はそれに対して不真実心と言ってよいでしょう。この2つの意味について親鸞は「御消息」の中で次のように述べています。

わが身をたのみ、わがはからひのころをもつて身口意のみだれごころをつくるひ、めでたうしなして浄土へ往生せんとおもふを自力と申すなり。また他力と申すことは、弥陀如来の御ちかひのなかに、選択摂取したまへる

第十八の念仏往生の本願を信樂するを他力と申すなり。

また、親鸞著「唯信鈔文意」の中では「廻心といふは自力の心をひるがへし、すつるをいふなり。」と、述べられています。自らの「はからいの心」のことを、親鸞はわかりやすく「自力の心」と表現したのでしょう。そしてそのはからいの心をひるがえし捨てることによって真実心(如来藏心)を得るわけですが、そのための方便が念仏往生の本願を信樂することであると説いているのでしょう。すなわち、次のような対比が成り立ちます。

① 「自力の心」||「はからいの心」||「不真実の心」

② 「他力の心」||「如来の心」||「真実心」

ここで「はからいの心」というのは親鸞が「わがはからいのころ」と表現しているように自分でああしようこうしようとはからう心のことです。そういう心にはどうしても打算による邪念が混ざり込んでしまっています。しかし、人間には煩惱が有りますからいたしかたのないことなのです。それに対して「如来の心」というのは純粹な良心の結晶のような心のことです。この心もすべての人が持っている心なのですが、自分でああしようこうしようとはからう心

ではありません。すべての人が持っている如来と等しい心なので如来蔵心と呼ばれることがあります。また、仏と等しい性質を持っているということから仏性とよばれることもあります。

この仏性について、親鸞作『浄土和讃』には「信心よろこぶそのひとを 如来とひとしときたまう 大信心は仏性なり 仏性すなわち如来なり」と詠われています。「信心よろこぶ」という表現は前に引用した頁の文章では「信楽」と表現されました。「信楽」というのは、信じるのが楽という意味でしょう。信じることに無理がなくて楽なのです。信じる心にうそがなく真実であるから無理がないのです。そして信じるのが自然で無理がなく、むしろ楽しく嬉しいから、信心よろこぶと表現されているでしょう。「信楽」の語源は梵語の「プラサーダ」を漢訳したもので、「淨信」と訳されることもあります。清々しく晴れ晴れとした心のことです。嘘偽りがなく真実であり、世俗の打算を超えて邪念がありません。究極的には煩惱に汚されない純粹で清らかな心であることから、如来と等しい仏の心であると説かれているのです。ということは、自分が楽をしたいという損得勘定のために信じたのでは、清らかな信楽が得られたとはいえません。そんなことではとても如来とひとしいとはいえないからです。如来の心は打算がなく純粹で清らかな慈（人を幸せにしたいと思う心）悲（人の苦しみを無くしてあげたいと思う心）の心であるからです。ところで、如来の心がそうであるなら、如来は我々に仏の心を授けようとはたらきかけていらっしゃるはずだと考えてもおかしくはありません。そのはたらきかけが他力の真実心ということになります。

覚如は「最要鈔」の中で、仏の心と信心の関係について次のように述べています。

この信心をば、まことのこころとよむうえは、凡夫の迷心にあらず、またく仏心なり。この仏心を凡夫にさづけたまふとき、信心といはる、なり。

次の節では、この「信心」について考えてみます。

第四節 凡夫のまごころが仏のまごころと等しくなる心 「真実心」の真実の信心としての意味

【例文 仏教語大辞典】（石田瑞麿著 小学館）には「真実心」の意味が次のように記されています。

しんじつしん【真実心】

仏の本願の救いを信じて、一点の疑心もない心。

仏の本願とは、親鸞によると「無量寿経」の第十八願のことであり、それは次のような内容です。

一八 たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覚を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。

この本願はすでに成就していると釈尊は説いています。みなさんはこのことを事実であると信じていることができるでしょうか。もし一点の疑心もなく信じていることができたなら、その心が「真実心」である、ということなのです。

次に、この「真実心」に関連して、親鸞が書いた文を読んでもみたいと思います。親鸞はその著書「愚禿鈔」の中で、心の内と外を対比させて不真実心を戒めています。その箇所を次に引用し括弧内に現代語訳を添えます。

内外対

内外道、外仏教（内は仏以外の教えを信じていながら、外は仏の教えを信ずるかのよう装っている。）

内聖道、外浄土（内は聖道の教えを信じていながら、外は浄土の教えを奉ずるかのよう装っている。）

内疑情、外信心（内は疑いの気持ちがありながら、外は信じているかのよう装っている。）

内悪性、外善性（内は悪性を持ちながら、外は善性を持つてるように見せかけている。）

内邪、外正（内はよこしまなのに、外は正しいようなふりをしている。）

内虚、外実（内には何も無いのに、外には中身があるかのよう装っている。）

内非、外是（内はずじが通っていないのに、外は道理にかなっているかのよう装っている。）

内偽、外真（内はにせ物であるのに、外は本物であるかのように装っている。）

内雑、外専（内は雑多であるのに、外ではただ一つのものに心が向いているかのように装っている。）

内愚、外賢（内は愚かなのに、外は賢いふりをしている。）

内仮、外真（内は一時的な仮のものしかないのに、外は本物があるかのように装っている。）

内退、外進（内は退こうとしながら、外は進もうとしているかのように見せかけている。）

内疎、外親（内はよそよそしいのに、外は親しそうに装っている。）

内遠、外近（内は遠くにいながら、外は近くに装っている。）

内迂、外直（内は回り道をとりながら、外はまっすぐに進んでいるかのように装っている。）

内違、外随（内は違うのに、外は随うかのように装っている。）

内逆、外順（内は逆らいながら、外は順うかのように装っている。）

内軽、外重（内は軽いのに、外は重いかに装っている。）

内浅、外深（内は浅いのに、外は深いかに装っている。）

内苦、外楽（内は苦しいのに、外は楽であるかのように装っている。）

内毒、外薬（内は毒であるのに、外は薬であるかのようにみせかけている。）

内怯弱、外強剛（内は怯えていて弱いのに、外はいかにも強そうに装っている。）

内懈怠、外勇猛（内は怠けているのに、外はとても努力をしているように装っている。）

内間断、外無間（内はとぎれとぎれであるのに、外は絶え間なく継続しているように装っている。）

内自力、外他力（内は自力であるのに、外は他力であるかのように装っている。）

そして、親鸞の主著である『教行信証』には次のような言葉が繰り返して出てきます。「この雑毒ぞうどくの行ぎょうを回まわしてかの仏

の浄土に求生せんと欲するは、これかならず不可なり」と。真実心のないうわべだけの善行によって浄土に生まれ変わりたいと思っても、これはかならず不可だということです。また、蓮如は次のように述べています。

信心といえる二字をばまことのころとよめるなり。まことのころというは、行者のわろき自力のころにてはたすからず、如来の他力のよきころにてたすかるがゆえに、まことのころとはもうすなり。また名号をもつてなにのころえもなくして、ただとなえてはたすからざるなり。

蓮如著【御文・一】

ころえなくただ名号を唱えても助からないと述べられています。親鸞も「真実の信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり【教行信証】」と述べています。真実の信心なくしてただ唱えても助からないのです。蓮如はさらに次のように述べています。

ふかく信じて、さらに一念も本願をうたがうころなければ、かたじけなくもその心を如来のよくしろしめして、すでに行者のわろきころを、如来のよき御ころとおなじものになしたまうなり。このいわれをもって仏心と凡心と一体なるといえるはこのころなり。

蓮如著【御文・二】

如来の心が純粹で清らかな真実心にもとづく慈悲の心であると本心から信じることが無理なく自然にできるようなら、その人の心は真実心であり、如来の心と等しい心になっているはずだ、ということであるのでしょう。

また、存覚は二河白道のたとえを使って次のように説明しています。

されば、「水火の二河」は衆生の貪瞋なり。これ不清浄の心なり。「中間の白道」は、あるときは行者の信心といわれ、あるときは如来の願力の道と釈せらる。これすなわち、行者のおこすところの信心と、如来の願心とひとつなることをあらわすなり。

存覚著【浄土真要鈔】

さらに、次のように説明しています。

法蔵比丘として難行苦行・積功累徳したまひしとき、未来の衆生を浄土に往生すべきたねをば、ことごとく成就

したまいき。そのことわりをききて、一念解了の心おこれば、仏心と凡心とまったくひとつになるなり。

存覚著『浄土真要鈔』

その経緯や謂れを知って納得して一点の疑いもない心がおこれば、その人の心は仏心とまったくひとつになるということなのでしよう。

また親鸞は次のように述べています。

浄土の真実信心の人は、この身こそあさましき不浄造悪の身なれども、心はずでに如来とひとしければ、如来と申すこともあるべしとしらせ給え。

親鸞著『御消息集(善性本)』

第五節 「真実心」の三つの意味(まとめ)

「真実心」という言葉の意味は、用例から分類すると次の三つの意味にまとめることができます。

① 世俗的な意味、② 究極的な意味、③ それらを媒する中間的な意味、の三つであり、具体的には左表のとおりです。

しんじつしん【真実心】

① (誠心) うわべだけではなく奥底から思っているまことの心。まごころ。一所懸命な心。良心。

② (真心) 煩惱に汚されない本来の清らかな心。仏心。仏性。

③ (信心) 仏の本願の救いを深く信じて一点の疑いもない心。信樂。淨信。

このまとめでは、「真実心」の三つの意味の見出し語として、「誠心」、「真心」、「信心」、を掲げています。その理由は、「真実心」の三つの意味の区別を番号①②③で呼ぶよりも、その意味を代表して表す簡潔な語で呼んだほうが

便利だからです。これらは何れも「まことのこころ」と訓読することができ、語呂のうえでもなじみやすいと思われます。

第二章 「真実心」という言葉の同義語・類義語

第一節 はじめに

たとえば親鸞の主著である「教行信証」の中には、「真実心」という語は十九回使われています。その数は他の用語と比較して特別に多いというわけではありません。たとえば「真性」という語は二十六回使われています。「信心」という語に至っては六十七回も使われています。そういった用語は他にも異なる多くの語が使用されており、それらの中には「真実心」と同義語・類義語として使われていると考えられるものも多くあります。この章では、どのような語が真実心と同義語・類義語であるかを考えることによって、真実心の意味を知る手がかりとしたいと思います。

第二節 字義から見た同義語・類義語

「真実心」は通常「しんじつしん」と音読される言葉ではありますが、あえて訓読するとしたら、それは「まことのこころ」と読むのが適切でしょう。つまり「真実心」と「まことのこころ」は同義語です。この節では、まずそのことを証明して、次にそのことを手掛かりとして「真実心」の同義語・類義語を探して行くことにします。

「まこと」が「真実心」の同義語であることの証明

「まこと」という言葉は、『広辞苑』を引くと「真」「実」「誠」の字が当てられています。一方、「真実」という言葉を『岩波仏教辞典』で調べると、「漢語の〈真実〉は漢訳仏典から現れる言葉で（中略）「真、実也」なる訓詁があるように、同義の二字を重ねて造られた語。」とあります。よって、「真実心」という言葉は、字義からそのままに訓読すれば「まことのまことのまこと」とあり、あるいは繰り返しを省いて「まことのまこと」と読めることが分かります。実際、そのことを示す用例をいくつも見つけることができます。たとえば、法然は手紙の中で次のように述べています。

至誠心といふは真実の心也。その真実といふは、身にふるまひ、口にいひ、心におもはん事、みなま事の心を具すべき也。すなはちうちにはむなくして、ほかをかざる心のなきをいふ。この心はうき世をそむきて、ま事のみにちにおもむくとおほしき人々の中に、よくよく用意すべき心ばへにて候也。 【法然全集 消息編】

また、聖覚はその著書『唯信鈔』の中で次のように述べています。

おおよそ、仏道には、まずまことのおこすべし。そのまことならずは、そのみちすすみがたし。阿弥陀仏の、むかし菩薩の行をたて、浄土をもうけたまいしも、ひとえにまことのおこしたまいき。これによりて、かのくにうまれんとおもわんも、またまことのおこすべし。その真実心というは、不真実のころをすて、真実のころをあらわすべし。まことにふかく浄土をねがうころなきを、人におうては、ふかくねがうよしをいい、内心にはふかく今生の名利に着しながら、外相にはよをいとうよしをもてなし、ほかには善心あり、とうときよしをあらわして、うちには不善のころもあり、放逸のころもあるなり。これを虚仮のころとなづけて、真実心にたがえる相とす。これをひるがえして、真実心をはころえつべし。

聖覚著『唯信鈔』

右の二つの用例では「真実の心」「ま事の心」「真実のこころ」「まことのこころ」「真実心」の五語は同義語として使われています。以上で、「真実心」は「まことのこころ」と同義語であることが証明できました。

〔二〕「まことのこころ」をキーワードとして同義語・類義語を探す

次に、この「まことのこころ」という言葉をキーワードとして、「真実心」という言葉の同義語や類義語を見つけて行きたいと思います。まず、「まこと」という言葉に着目して、「まこと」という読み漢字が他にはないか、漢和辞典で調べてみます。そうすると随分と多くの漢字が見つかります。「真・実・誠・信・眞・實・諒・諦・允・款・惇・良・亮・・・」〔漢字源〕。ということは、「まことのこころ」と読める言葉は、他にもたくさん存在するはずで、まず、「まこと」と読む漢字の数が多いので、ある程度絞り込んで考えて行きます。漢字を絞り込む方法として親鸞の名著である「教行信証」をモデルとします。「教行信証」の中には、しばしば「まことに知りぬ」という言葉が出てきます。何かを論証したとき、結論を言う際にこの表現が使われています。「教行信証」はもともと漢文で書かれた書物ですので「まことに」と読む言葉も本来は漢字で書かれています。そして、そこで使われている漢字は一通りではなく、使われる個所によっていくつかの異なる漢字が当てられています。次にそれらをすべて書き挙げてみます（この表現は合計15回出てきます）。

信まことに知りぬ 〔教行信証〕行巻2回、信巻2回、化巻1回

良まことに知りぬ 〔教行信証〕行巻2回、化巻1回、

誠まことに知りぬ 〔教行信証〕行巻1回、信巻1回、証巻1回

真まことに知りぬ 〔教行信証〕信巻3回、化巻1回

これら以外に、「実に」という言葉も「まことに」と読んで「教行信証」の中にしばしば出てきます。

実まことに

〔教行信証〕信卷12回、証卷1回、真卷7回、化卷5回

そこで、「まこと」と読む漢字のうちで、特によく使われる代表的なものを「真」「実」「誠」「信」「良」の5つに絞ります。そして、その意味を漢和辞典『漢字源』で調べてみます。

真 ①まこと。うそや欠けめがない。充実している。(対)仮。(類)実。

②欠けめなく充実した状態。▽儒家では誠といい、道家では真という。

〈類義〉↓信

実 ①み。中身のつまった草木のみ。

②みのる。草木のみの中身がつまる。

③みちる。内容がいっぱいつまる。

④まこと。内容があつてそらごとでない。(対)虚

〈類義〉満は、容器にいっぱいに物をみたくすること。充は、中身をいっぱいにつめること。↓信

誠 ①まこと。うそのない心。また、ごまかしのない言行。

②まこと。かけめごまかしのない。真実の。

③まことにする。ごまかしのない状態にする。かけめのないものにしあげる。

〈類義〉↓信

〈参考〉「まこと」「は」「実」「真」とも併く。

信 ①まこと。言明や約束をどこまでも通すこと。

②まこと。ほんとうであるさま。

③まことに。ほんとうに。

④信用する。

〈類義〉真は、仮の反対で、びっしりつまっていること。実は、虚の反対で、内容がつまっていること。誠は、欠けめなく、首尾のままとまっていること。

良 ①よい。けがれがない。質が良い。わざがすぐれているさま。

②人格的にすぐれていること。すぐれていること。

③まことに。

以上のことからこれらの五字は互いに同義語または類義語としての意味をもっていることがわかります。これら五字のうちのみずれかと「心」の字を組み合わせた熟語を国語辞典「広辞苑」で探すと、次の様に載っています。

まごころ 【真心】 誠の心。いつわりのない真実の心。赤心。

しんしん 【真心】 まごころの心。まごころ。

(じつしん 【実心】 「広辞苑」には載っていません。)

せいしん 【誠心】 いつわりのない心。まごころ。――「誠意」

しんじん 【信心】 神仏を信仰して祈念すること。また、その心。信仰心。

りょうしん 【良心】 (conscience) 何が善であり悪であるかを知らせ、善を命じ悪をしりぞける個人の道德意識。

また、これら五字「真」「実」「誠」「信」「良」を互いに二字組み合わせさせた熟語は、二十通りありますが、それらのうち国語辞典「広辞苑」に載っているものは次の六通りです。

しんじつ 【真実】 うそいつわりでない、本当のこと。まこと。

しんじつ 【信実】 まじめでいつわりのないこと。正直。

しんしん 【真信】 まごころの信心。

しんせい 【真誠】まこと。いつわりのないこと。

せいじつ 【誠実】（他人や仕事に対して）まじめで真心がこもっていること。

せいしん 【誠信】①まこと。誠実。信実。②誠意から出た信仰。

以上のことから「まことのごころ」と訓読できる語で、「真実心」の同義語・類義語としては、

真心 真心 実心 誠心 信心 良心 信実心 真信心 真誠心 誠実心 誠信心

が挙げられます。ただし、右の熟語のうちで二字熟語に「心」をつけた三字熟語は、いずれも「広辞苑」には載っていません。用例は少ないだろうと思われまます。また、「実心」も載っていませんが、古典の中には用例があります。

さらに、理屈の上では三字、四字を組み合わせて熟語を作ることでもできるはずで、実際「教行信証」には「真実信心」「真実誠種心」「真実誠満心」のような用例も存在します。

第三節 真宗聖典の中での同義語・類義語

前節では、「まことのごころ」と訓読できる言葉に限定して同義語・類義語をみつけてきましたが、親鸞の著書をはじめ「真宗聖典」の中には「まことのごころ」とは訓読できない同義語・類義語も多数出てきます。次にその手掛かりとなる文を幾つか引用し、その中から同義・類義の語句を抽出してみます。

（真宗聖典二二五頁）

たとい身心を苦勵して、日夜十二時、急に走め急に作して頭燃を灸うがごとくするもの、すべて「雑毒の善」と名づく。この雑毒の行を回して、かの仏の浄土に求生せんと欲するは、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しくかの阿弥陀仏、因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念刹那も、三業の所修みなこれ真実心の中に作したまいしに由つてなり

【教行信証（信）】

（真宗聖典二二四頁）

三心の字訓を案ずるに、真実の心にして虚仮雜わることなし、正直の心にして邪偽雜わることなし。真に知りぬ、疑蓋間雜なきがゆえに、これを「信業」と名づく。「信業」はすなわちこれ一心なり。一心はすなわちこれ真信心なり。

【教行信証（信）】

（真宗聖典二二六頁）

この雜毒の行を回して、かの仏の淨土に求生せんと欲うは、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しくかの阿弥陀仏因中に菩薩の行を行ぜし時、乃至一念一刹那も、三業の所修、みなこれ真実心の中に作したまえるに由つてなり。

【教行信証（信）】

（真宗聖典二二六頁）

しかれば、大聖の真言・宗師の積義、まことに知りぬ、この心すなわちこれ不可思議・不可称・不可説の一乘大智願海、回向利益他の真実心なり。これを「至心」と名づく。

【教行信証（信）】

（真宗聖典二二七頁）

利他回向の至心をもつて、信樂の体とするなり。しかるに無始より已來、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂なし。法爾として真実の信樂なし。ここをもつて無上功德、値遇しがたく、最勝の淨信、獲得しがたし。一切凡小、一切時の中に、貪愛の心常によく善心を汚し、瞋憎の心常によく法財を焼く。急作急修して頭燃を灸うがごとくすれども、すべて「雜毒・雜修の善」と名づく。また「虚仮・諂偽の行」と名づく。「真実の業」と名づけざるなり。この虚仮・雜毒の善をもつて、無量光明土に生まれんと欲する、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しく如來、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念・一刹那も疑蓋雜わることなきに由つてなり。この心はすなわち如來の大悲心なるがゆえに、必ず報土

の正定の因と成る。如来、苦惱の群生海を悲憐して、無碍むがい廣大の淨信をもつて諸有海に回施したまえり。これを「利他真実の信心」と名づく。

【教行信証(信)】

(真宗聖典二一九頁)

大慈大悲を名づけて「仏性」とす。何をもつてのゆえに。大慈大悲は常に菩薩に随うこと影の形に随うがごとし。一切衆生畢つひに定んで当に大慈大悲を得べし。このゆえに説きて「一切衆生悉有仏性」と言えるなり。

【教行信証(信)】

(真宗聖典二一九頁)

大信心はすなわちこれ仏性なり。仏性はすなわちこれ如来なり。仏性は「一子地」と名づく。何をもつてのゆえに、一子地の因縁をもつてのゆえに菩薩はすなわち一切衆生において平等心を得たり。一切衆生は畢つひに定んで当に一子地を得べきがゆえに、このゆえに説きて、「一切衆生悉有仏性」と言えるなり。一子地はすなわちこれ仏性なり。仏性はすなわちこれ如来なり

【教行信証(信)】

(真宗聖典二三五頁)

「至心」・「信樂」・「欲生」、その言異ことばちがひなりといえども、その意惟一なり。何をもつてのゆえに、三心すでに疑蓋ぎがい雜まじわることなし。かるがゆえに真実の一心なり、これを「金剛の真心」と名づく。金剛の真心、これを「真実の信心」と名づく。

【教行信証(信)】

(真宗聖典二四一頁)

真実一心すなわちこれ大慶喜心なり。大慶喜心すなわちこれ真実信心なり。真実信心すなわちこれ金剛心なり。金剛心すなわちこれ願作がんさく仏心なり。願作仏心すなわちこれ度衆生心なり。度衆生心すなわちこれ衆生を撰取せんしゆして安樂淨土に生ぜしむる心なり。この心すなわちこれ大菩提心なり。この心すなわちこれ大慈悲心なり。

（真宗聖典四一六頁）

今この心はこれ、如来の清淨広大の至心なり、これを真実心と名づく。至心はすなわちこれ大悲心なるがゆえに、疑心あることなし。二つには「信樂」、すなわちこれ、真実心をもつて信樂の体とす。 【浄土文類聚鈔】

（真宗聖典四二二六頁）

【經】に云わく、「一者至誠心」。至とは真なり、誠とは実なり。一切衆生身口意業に修するところの解行、必ず真実心の中に作したまえるを須いんことを明かさんと欲う。外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ。内に虚偽を懷きて、貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性侵めがたし、事蛇蝎に同じ。三業を起こすといえども、名づけて雑毒の善とす、また虚偽の行と名づく、真実の業と名づけざるなり。もしかくのごとき安心起行を作すは、たとい身心を苦勵して日夜十二時、急に走め急に作すこと、頭燃を炙うがごとくするは、すべて雑毒の善と名づく。この雑毒の行を回してかの仏の浄土に求生せんと欲うは、これ必ず不可なり。何をもつての故に、正しくかの阿弥陀仏因中に菩薩の行を行じたまいし時、乃至一念一刹那も三業の所修、みなこれ真実心の中に作したまいしに由つてなり。 【愚禿鈔】

（真宗聖典九二二頁）

おおよそ、仏道に在るには、まずまことのころをおこすべし。そのころまことならずは、そのみちすすみがたし。阿弥陀仏の、むかし菩薩の行をたて、浄土をもうけたまいしも、ひとえにまことのころをおこしたまいき。これによりて、かのくににうまれんとおもわんも、またまことのころをおこすべし。その真実心というは、不真実のころをすて、真実のころをあらわすべし。まことにふかく浄土をねがうころなきを、人におうては、ふかくねがうよしをいい、内心にはふかく今生の名利に着しながら、外相にはよをいとうよしをもてな

し、ほかには善心あり、とうときよしをあらわして、うちには不善のころもあり、放逸のころもあるなり。これを虚仮のころとなづけて、真実心にたがえる相とす。これをひるがえして、真実心をばころえつべし。

【唯信鈔】

(真宗聖典九二三頁)

いま真実心というは、浄土をもとめ穢土をいとい、仏の願を信ずること、真実のころにてあるべしとなり。かならずしも、はじをあらわにし、とがをしめせとはあらず。

【唯信鈔】

(真宗聖典九三三五頁)

一心一向なる、これ至誠心の大意なり。わが身の分をはからいて、自力をすてて他力につくころのただひとすじなるを、真実心というなり。

【後世物語問書】

以上、「真実心」と関連した主な文を抜き出しました。次に、これらの文中より「真実心」と同義・類義の語句を抽出して並べてみます。

・三心(至心・信樂・欲生)

・正直の心

・信樂

・信樂の体

・清浄の信樂

・法爾として真実の信樂

・一心

- ・真実一心
- ・真実の一心
- ・金剛の真心
- ・金剛心
- ・大慶喜心
- ・仏性
- ・大信心
- ・真実信心
- ・真実の信心
- ・利他真実の信心
- ・願作仏心
- ・度衆生心
- ・衆生を摂取して安樂浄土に生ぜしむる心
- ・大悲心
- ・大慈悲心
- ・大慈大悲
- ・一子地
- ・平等心
- ・大菩提心

・至心

・利他回向の至心

・如来の清浄広大の至心

・無碍広大の淨信

・至誠心

・まことのこころ

・不真實のこころをすて、真實のこころをあらわすべし

・淨土をもとめ穢土をいとい、仏の願を信ずること、真實のこころにてあるべしとなり

・一心一向なる

・自力をすてて他力につくこころのただひとすじなる

【真宗聖典】の中でこれらはいずれも「真實心」と同義乃至類義の語句として述べられています。それぞれの語句の意味合いは少しずつ異なりますが、いずれも一つの対象である「真實心」を様々な角度から見て表現したものと考えられます。したがってこれらの語句は、その意味を深く味わうことにより「真實心」のもつ本当の意味にたどりつく重要な語句であるということができるといえるでしょう。

第三章 まとめ

第一章では辞書からその意味を読み取るという方法で、第二章ではその同義・類義の語句を探すという方法で、校訓「真實心」の意味について考えてきました。この二つの方法によりその意味はほぼ明らかになったといつてよいで

しょう。真実心とは純粹で清らかなまごころのことです。そのまごころとは、慈（人を幸せにしたいと思う心）悲（人を苦しみを無くしてあげたいと思う心）の心のことです。ところが私たちにとって、人を幸せにすることは難しく、人の苦しみを無くしてあげることも難しいことなのです。なぜなら私たち凡夫の行う善は、雑毒の善であるからなのです。煩惱に覆われた心を持つている私たちには完全な善を行うことは難しいのです。善かれと思つてやった事であっても逆に人を不幸にしたり人の苦しみを増したりすることすらあるのです。そのような善を振り向けて浄土へ生まれ変わろうと思つても生まれ変わるわけがありません。苦しみの世界に生まれ変わるばかりです。それならばどうすればいいのでしょうか。何か方法はないのでしょうか。今の時代に残された唯一つの方法は、完全なる善を成し遂げた人である仏が私たちに向けられた完全なる善意である真実心を用いるという方法です。それが親鸞が私たちに教えてくださった方法なのです。私たちは、誠心誠意まごころを尽くして、しかも全ての人々に平等に、幸せを願ひ、苦しみが無くなることを願ひ、至らないところは仏の真実心を用いて、でき得る限りのことを実行しなければなりません。そしてそのことが義務感からではなく自然で、むしろ楽しく喜んで行なえるようになったら、その人の心は仏の心に等しい真実心になったということができるといふことができます。